

2014年5月18日 主日礼拝説教（要約）

聖書 ルカによる福音書4章38～41節

聖書「一人一人に手を置いて」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエスは、ある安息日の礼拝の後、シモンの家に行かれました。シモンというのは、まもなく主イエスの弟子となって歩み始めるシモン・ペトロのことです。シモンはすでに妻をもっており、妻の母親も一緒に暮らしていました。主イエスがカファルナウムでの宣教を始められて、一家はもう主イエスとの親しい交わりの内にあったようです。ひょっとするとシモン・ペトロその人よりも姑の方が、主イエスの言葉を熱心に喜んで聞いていたのかもしれませんが。けれども、高熱を出し、その日礼拝に来ることができなかったシモンの家のおばあさんのことを、人々は主イエスに伝え、何とかしてあげてほしいと頼んだので、主イエスはお訪ねになったのです。

主イエスは、「枕もとに立って熱を叱りつけられ」ます。叱りつけるとは、会堂で悪霊に取りつかれていた人に「この人から出て行け」とお叱りになった（ルカ4：35）のと同じような行為です。彼女の高熱が悪霊だというわけではありませんが、主イエスは私たちに苦しめ悩ませる病や痛み、およそ私たちに死に至らしめるものに対して、憤りを覚えられ、身を挺して対決してくださいます。そして、このような癒しの業は、預言者イザヤが預言していた「捕らわれている人に解放を告げ、圧迫されている人を自由にする」（ルカ4：18）という救い主の御業を雄弁に証するものでした。

彼女は、熱がさがると、すぐに起き上って、いつものように主イエスと会堂の仲間たちをもてなしました。この「もてなす」と言う言葉は、奉仕を表すディアコニアという言葉の動詞が使われていますが、その動詞の形は、一回的な過去の事柄を表すと言うのではなく、いつもそうしていた、何度もそういうことをしたということの意味合いをもつ形になっています。おそらく、シモンの家はカファルナウムにおいて主イエスと会堂の仲間たちを迎える家となっていたし、その後もますますそうになっていったのでしょう。

シモン・ペトロが主イエスに「今から後、あなたは人間をとる漁師となる」（ルカ5：11）と言われ、弟子として歩み出す話は有名です。その出来事を私たちは突然の召しであるといい、一切を捨てての献身というイメージでとらえることが多いのではないのでしょうか。しかし、そこにはこうした後日談ならぬ前日談があるということ、家族あげての主イエスとの交わりがあり、御言葉に聴く体験があったことも心に留めておきたいと思います。また、ずっと後のことになりますが、パウロはペトロが妻を連れて伝道に歩いているということを書いています（コリント一9：5）。

大事なことは、このように家庭に主イエスをお迎えすることです。そして、家庭の中で誰かが御言葉を聴き始める、誰かが主イエスにお仕えするようになる、そのことを通してその家庭全体が主イエスと無関係でなくなるのです。主イエスは、そこからさらに新しい救いの御業を進めてくださいます。わが家に主イエスをお迎えすることの幸いを

覚えたいと思います。

さて、日が暮れるとともに主イエスのもとに続々と病人を連れた人々がやってきました。安息日が終わり、仕事も、医者にかかることも自由にできる時間になったからです。主イエスは疲れをいとわず、そのような人々にも憐みと救いの手を差し伸べられます。主イエスは彼らの「一人一人に手を置いていやされた」と書かれています。主イエスは10人20人をひとまとめに、いわば、十把一絡げに救いの御業をされる方ではありません。福音書を読むと、どこにおいても、どんなに忙しくても、一人一人に対してというのが主イエスのなさり方である。

ところで、私たちが主イエスを思い浮かべる時、「手を置いて」というのはごく自然なことと感ずますが、実は旧約聖書とかユダヤ教のラビの文書の中では、手をおいていやすという場面はないそうです。つまりこれは主イエスから始まり、その後使徒たちへと伝わっていった、いわばキリスト教的な癒しのスタイルだそうです。では、旧約聖書においてはどういう場合に手を置くかと言うと、それは祝福の場面です。祝福の行為として、手が差し伸べられたり置かれたりします。ということは、「手を置いていやされた」というのは、主イエスの手に霊験あらたかな、何か魔術的な力が働いたというよりも、主イエスが病める人々一人一人を祝福されたということを表します。彼らは、主イエスと出会い、主イエスの祝福をいただく中で、癒されていったのだと読むことができますでしょう。

コリントの信徒への手紙二の12章で、使徒パウロは「わたしの身に一つのとげが与えられた」と書いています。何らかの癒されない病かどうしようもない不自由を抱えていたようです。そのために彼は何度も祈りました。けれども、その中で彼は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」という主の御声を聞き、「だからキリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」と言っています。ここで弱さと訳されているのは病気という言葉です。彼は病気の中で主の恵みをいただき、神からの強さをいただいたのです。新しく前向きに生きる力を得たのでした。

主イエスはガリラヤの町々を巡りながら、力強く宣教をし、病んでいる人々に対していやしの業をしておられます。しかし、それらは決して大々的な奇跡のパフォーマンスではありません。「お前は神の子だ」とわめいて退散する悪霊に、主イエスはもの言うことをおゆるしにはなりません。たとえ宣伝効果があったとしても、悪霊による宣伝をよしとはされないからです。主イエスは一人一人に手を置き、一人一人と人格的に関わりながら、一人一人を御言葉と聖霊によって祝福していかれるのです。私たちはこのような主イエスを愛するたち、身近な人たちに紹介し、その救いの御業を丁寧に取り次いでいきたいものです。